



春風をいっぱいうけて泳ぐこいのぼり（京都市・高野川にて）

（2006年5月号のおもな内容）

- ・勝ち組負け組の社会を考える…………… 2
- ・現地報告 安心安全な自治体を  
舞鶴市 日本海精錬問題…………… 3
- 城陽市 水と土を考える会…………… 4
- 加茂町フェロシルトの早期撤去を… 5
- ・連載② 小説書きの独白 ②…………… 6
- ・まち研コーナー ① まいづる研………… 8
- ・全国のホット情報 ⑦ 東海研………… 9
- ・子ども主人公の学校づくり…………… 10

くらし  
と  
自治  
京都

大

（社）京都自治体問題研究所  
TEL・FAX (075) 241 - 0781  
メール・kjitiken@jt2.so-net.ne.jp  
発行人 土居靖範

（「住民と自治」5月号付録）

## 格差社会・勝ち組負け組みの社会を考える

辻 昌秀（京都総評副議長）

京都総評は「最低生計費」の試算を行いました。これは、労働者の最低限必要な生計費はいくらなのかを試算したものです。1年半かけておこなった試算は、京都市内在住で単身世帯と4人世帯の二つのモデルでおこないました。単身世帯で年間2225112円、4人世帯で年間5494872円（いずれも公租公課込み）というのが試算の結果でした。詳細は、報告書（現在、概略版。4月に本報告を出す予定）を参照していただくとして、どうしてこういう試算をしたのかなどについて触れたいと思います。

「格差社会」という言葉が盛んに使われるようになりました。そして、確実に「砂時計」現象が広がっていることが指摘されています。「砂時計」現象とは、高額所得の人が低所得に落とされたりすることです。実際、国税庁の調査（民間労働者のみで源泉徴収に基づく統計）では、1999年以降04年までに、300万円以上の収入の労働者数はすべての収入層で220万人減少し、300万円以下の労働者数は175万人増加しました。

そして、青年労働者を中心に、非正規雇用が急増し、低収入しか得られず自立した生活ができないようになってきているのです。今、こうした労働者は、ワーキングプアーと呼ばれ世界中で問題となっています。勝ち組負け組みということばもはやりましたが、青年の中では、勝ち組に残れば何とかなるのではないかというゆがんだ意識も一部で出てきています。しかし、自分さえよければいいという考え方で、片付く問題ではありません。

NHKが「城塞の町」という番組を放映したのを見た方もいると思います。アメリカで、金持ち層が自分たちの安全を確保するために城壁をめぐらし一般の市民が入れないようにしているのです。日本でもこうしたゆがんだ社会に行き着くことになりかねません。ちなみに、城塞の町は全米で1万ヶ所、100万人以上が住んでいるそうです。

こうした問題を解決するには、EUなどで行っているように、最低賃金を機能させるようにしなければなりません。日本の最低賃金は低すぎてまともに機能していません。ところが最近の国会答弁で、川崎厚生労働大臣は「基本的には暮らせる数字」（3月13日）などととんでもないことを言っています。しかも、最低賃金が生活保護よりも低いと問題にしましたが、今では、ぎりぎりの生計費であるはずの生活保護を引き下げる動きが具体的にはじまっています。つまり、これ以下だと貧困だという最低限の生計費が明らかになっていないことを示しています。その意味で、具体的に最低生計費の試算をし、数字を示したことは大変大きな意味があります。今後、私たちは、この最低生計費試算の結果を広く知らせ活用していくためにがんばりたいと考えています。

## 現地報告① 安心安全な自治体づくりは緊急の課題

### 日本海精錬問題―舞鶴の環境をめぐる

迫田 薫（エコネットまいづる事務局長）

舞鶴市に所在し、よく新聞にも登場する日本海精錬株式会社は、廃バッテリーの解体をしている工場です。かつては住宅地に接近した場所に立地していましたが、1980年代従業員の鉛中毒が問題となり、周辺住民の運動もあり現在地（舞鶴市宇平）に移転しました。移転後も、何度か基準値を超える二酸化硫黄や鉛の排出で、保安庁や警察に逮捕されたりしてきました。昨年6月には公害物質の垂れ流しが9年にも及ぶと、行政の怠慢を追求する報道が新聞紙上にぎわしました。

周辺の住民からの声も受けて、私たちは知事と市長に要求書を提出、意見交換を経て、1ヶ月後には文書で回答を受けました。

この間、行政は府市で対策会議をつくり、企業への指導を強め、悪臭と山林の立木枯れの原因となった二酸化硫黄、周辺土壌の鉛汚染などの測定をしてきました。昨年12月に続いてことし3月に結果が報告され、土壌の鉛溶出測定で実に25カ所中19カ所で基準値を上まわっており、最高は基準値の28倍であることが明らかとなりました。府市は専門家委員会を開き測定結果を検討し、引き続き測定を継続することとしています。

私たちはすぐに問題点をまとめて、3月16日知事あてに要求書を提出しました。その主要点は、大気汚染対策、鉛汚染対策、魚介類汚染対策などについて、府の会社に対する指導と操業停止などの具体的役割を求めるものでした。また、情報公開・住民説明会の開催など、誰もが必要とする「安心安全」対策を求めるものでした。

この事件の最大の問題点は、昨年6月の新聞で報道されたように周辺住民と引揚記念館の職員が9年にわたって悪臭と亜硫酸ガスに悩まされ、保健所に通報してきたにもかかわらず、なぜ企業はそのまま操業を続けてこられたのか。なぜ、抜本的な改善をするまで、操業停止としないのか。住民にとって訴えても対応しない行政に対する不信が強まってきたという点にあります。

また、脱硫装置の設置について、昨年6月の新聞では、企業は年内には設置すると報道されているが、未だに設置されていないのはなぜか。府の回答では「設置は今年5月めど」とされていることもよく分からない点です。

これらの疑問に対して、府は次のように回答しています。

「この間ずっと企業を指導し、設備改善の努力をしてきた。年に数回排出ガスなどの濃度測定をしてきた。ほとんどが基準値以下であったが、時に濃度が高くなったこともあり、

濃度を下げるために煙突を高くするよう指導した。その結果排出ガスが引揚記念館を直撃することになり、悪臭や山林の木が枯れる被害を引き起こした。だから何もしなかった訳ではない。結果的にうまくいかなかったこともある。脱硫装置も、昨年6月の新聞報道までは年内に設置する予定ですすめてきた。しかし、設置場所に考えていた建物が違法建築だということになり、遅れている。すでに注文したパーツもきており、5月には設置できると考えている。測定の結果違法行為がなければ操業停止などの行政処分はできない。」

汚染物質の大量の排出がありマスコミも取り上げると、そのときは問題になるがしばらくすると元の木阿弥、今度こそという住民の期待は何度も裏切られてきました。なぜ環境汚染を続ける企業の規制ができないのか、府民の常識では理解しがたい。真偽のほどはともかく、周辺住民から「保健所が測定をする前には、工場は操業率を落とし、まわりの汚染物質を掃除している」といわれており、行政に対する不信が強まっています。行政の対応や調査結果などの情報はまったく住民に伝わっていないことも、原因の一端だと思われます。府は引き続き測定を続けるとしており、私たちと行政とのキャッチボールはまだまだ続こととなります。

(注) エコネットまいづるは、地域で石炭火電、大気汚染測定、地球温暖化防止をはじめとした環境問題を扱う市民団体です。

## 現地報告② 安心安全な自治体づくりは緊急の課題

### 新しい市民運動「城陽の水と土を考える会」がスタート

杉浦 喜代一（城陽市職労書記長・当研究所理事）

城陽で市民運動のうねりがわきおこっています。昨年闘われた市長選挙を契機に第2名神高速道路計画に反対する運動と城陽市の山砂利跡地への産廃投棄問題がきっかけになって地下水を考えようとする運動です。

今回は地下水問題の市民運動、「城陽の水と土を考える会」の運動を紹介します。

城陽市民が飲んでいる水道水の約7割は地下水です。その地下水が城陽市の山砂利跡地に産廃（京田辺の産廃と同じ「製品」が城陽にも投棄されている）が投棄されていれば遠からず飲み水に異常が起こるのではないかと、健康被害が自分だけではなく孫子の代にまで及ぶのではないかと思う市民が集い、「考える会」を立ち上げました。

「考える会」は昨年12月に発足総会を兼ねた第一回講演会を開催し、会場は100人を超える市民が詰めかけました。当日、現地調査もされた国土問題研究会の坂巻氏は山砂利採取地の中を流れる長谷川を調査しpHが12（強アルカリ）にもなっていることを講演会で明らかにされ、市民が情報を持つことの重要性を指摘されました。翌日このことが報

道されると市も府（山城北保健所）もびっくり仰天、さっそく調査を行い生コン工場の垂れ流しを摘発、是正させると言うおまけまでつきました。

市民がデータを持つことの重要性を認識した会員の方々はカンパを募り水質検査機器＝導電率計を購入、定期的な河川や井戸の調査をはじめています。2月25日には長池地域の調査を行いました。長谷川のp hは12月の12ほどではなくなったが、9を示し依然としてアルカリ性が強いことを確認しました。

学習活動も盛んで、3月の講演会では雨にもかかわらず70名を超える市民が地下や地下水の構造について学んでいます。京大防災研究所の奥西名誉教授が既存の地下水資料を使って、地下水汚染の拡散の危険性などを話され、近畿大助教授の鈴木氏が山砂利が大阪層群の城陽礫層と呼ばれる300万年～30万年前の堆積物であることなどが話されました。日常の生活レベルでは考えられない長い時間と目に見えない地下構造の話にもかかわらず聴衆は熱心に聞き入り、活発な質問も出されるなど熱の入った講演会となりました。

また、この時の質問がきっかけともなって青谷川上流に20年以前から放置されている山砂利採取跡地があり、その付近に産廃と思われるドラム缶が散在し、沈殿池の一部が壊れていることも調査で明らかになりました。この事実を市に突きつけ対策を行なうように求める活動も行なっています。

会員は現在100名を超え、学習会や定期的な地下水の水質調査、市や山砂利事業者組合への申し入れなど多彩な活動を展開しておられます。

### 現地報告③ 安心安全な自治体づくりは緊急の課題

#### 加茂町のフェロシルト 早期撤去はみんなのねがい

岩田 君子（日本共産党加茂町会議員）

フェロシルトが加茂のカントリークラブのコース造成に使われたのは、2001年のことです。56000トンが持ち込まれ、当時も「赤い土がトラックで運ばれる」と大きな問題になりました。地域住民の不安に、加茂カントリーや石原産業は、「土壌改良剤で作物もよく育つ、ゴルフ場は1トン150円で購入している」と説明してきました。

2005年6月、岐阜県で赤い水流出が社会問題になり、町内でも大問題になりました。

日本共産党議員団は、9月議会で取り上げましたが、京都府は産業廃棄物と認定していないため、取り組みが遅れていることなどが判明、府会議員団と連携をし、京都府と交渉しました。マスコミは大きく取り上げていたにもかかわらず、京都府の腰は重く、加茂カントリーは心配ないと繰り返していました。フェロシルト製造過程で廃液を混入の報道がされましたが、京都府は加茂町分はそれ以前の分であること、6月の石原産業の検査結果

が、環境基準値以下だと安全宣言もしました。

地域住民の撤去を求める声と、共産党議員団の働きかけで、購入時に、1トン3000円を払っていたいわゆる逆有償を認めるなど、「産業廃棄物」とやっと認定、検査も京都府が独自にすることになりました。

12月に6価クロムが基準値の36倍が検出されたと京都府は発表。特に覆いをしていないフェロシルトが露出している地点の値が高いことが判明しました。あわてた京都府は石原産業と加茂カントリーに早期撤去と廃棄法違反の告発をおこない、やっと動き始めました。撤去のためのボーリング調査で、検体を1ヶ月近く常温で放置し、揮発性物質の検査をしていたことがわかり、ここにも京都府のずさんさがあらわれました。安心安全をいう京都府の実態は、今回の知事選挙で大きく取り上げられました。今地元で、撤去のための協議が行われています。特に搬出に1万台のトラックが必要（往復2万台）で、どこを通るかがまだ確定できず、苦慮しています。石原産業は上場企業と信頼し、住民の声に耳を傾けなかった京都府の姿勢が、撤去を遅らせました。

連載 ②

## 小説書きの独白 ②

東 義 久（作家）

### 初めての歴史小説

前号では、ぼくが「小説山城国一揆」を書くことになった訳を書かせてもらった。

それまでぼくは歴史小説も時代小説も書いたことはなかった。現代ものばかりを書いていたのである。そのため、小説を書くにあたって史資料を集めたり、下調べをするようなことはなかった。が、歴史小説を書くとなると、そうはいかない。

或る程度の歴史はおさえておかなければならないのだ。そうでなければ全くのSF小説になってしまう。それではぼくが書こうとしている山城国一揆とは違ったものになる。

さすがのものぐさなぼくも山城国一揆について調べなければと思いついたのである。

### 史資料集めの大変さ

売れない地方の三文作家が史資料を集めるのは大変である。ぜひ教示してもらいたいと思っても、こちらが無名のため、なかなか相手にしてもらえないし、資料を手に入れようとすればこれがまた結構な金がかかるのである。

ぼくなんかと比べるのはおこがましいが、司馬遼太郎が「竜馬がゆく」を書いたときは神田の古書街の竜馬関係の文献が根こそぎ消えてしまったそうで、その金額は数千万単位だったということである。

そんな史資料集めがぼくなんかには出来ははずもなく、歴史に詳しい知り合いに山城国一揆の文献を教えてもらい、コピーをさせてもらったり、心優しい友人にはいただいたりしながら、それなりに史資料を集めることが出来たときには二年ほどの時間を費やしていた。

それから書き始めたのであるが、ぼくが歴史に対して専門的な知識を持ち合わせていないこともあって、集めた史資料を解説出来なかつたり、専門書は難解過ぎて理解出来なかつたりで、何度も筆が止まった。

ぼくはもともと筆が速いほうだと思っていたのだが、今回ばかりは違った。書き始めたときにはこれは千枚を超える作品になるだろう、それだけの枚数を使わなければ「山城国一揆」というものの全貌は描き切れないだろうという予感がしたのだった。

それまでぼくは同人誌に発表の場を求めていたため短編と中編が中心であったため、千枚を超える長編がどんなものかもうひとつ理解出来てはいなかった。

が、今さら書くのを止めるわけにはいかない。史資料の協力をさせていただいたひとや、ご教示してもらったひとたちに嘘をつくことになるし、また、なにより書くと自分で決めたのである。最後まで書き続けなければ、今後、どんな作品を書いたとしても途中で投げ出すことになるのではないか、そんな思いがぼくをしてなんとか書き続けさせたのである。

### **書くには書いたが**

三年かかって「山城国一揆」を漸く書きあげることが出来た。それから暫く校正に入った。まだワープロがやっと出始めたころで、原稿は手書きであった。

脱稿したときは四百字の原稿用紙で 1684 枚にもなっていた。取り敢えず書き切った充足感でぼくは満足していた。

が、そんな充足感も直ぐに大きな問題に突き当たらなければならなかったため、消えた。

無名の書き手の 1600 余枚の作品を出版してくれる出版社は無かった。今、考えればそれは当然だと判るのだが、当時のぼくとしては大作を仕上げたのにそれを出してくれるところがない、というのはまったくもって理不尽以外のなにものでもなかった。

出してくれる出版社が無いのなら自費出版しかない。が、そうなれば読んで字のごとく自分で費用を賄わなければならないのである。1600 枚もの作品を出版するとなると 300 万円ぐらいは必要となるらしいのだ。自慢ではないが、そんな金がぼくにあるはずなかった。

ところが、世の中そう捨てたものではなかったのである。図書出版文理閣という殊勝な出版社が出版してもよいとってくれたのだ。

ぼくは喜び勇んで出版社の社長に会いに出掛けた。ようやくぼくの作品が出版されるのである。

### **削ることの難しさ**

有頂天で出掛けたぼくの気分は直ぐに萎えた。出版社側の言い分は、1684 枚は取りあ

えず長い。この分量では上中下の3冊の分冊になる。それではプロの作家でも売れないだろうから、最低でも500枚は削って欲しい、というものだった。

三年もかけてようやく仕上げた作品である。たとえ一字一句たりとも削ることは出来ない。大袈裟に言えば一枚一枚がぼくの体の一部のように思えたのである。ぼくには返す言葉が無かった。

言葉を失くしたぼくが了解したように取った社長は、がんばって早く仕上げてください、といったのだった。なにをがんばれ、とこのひとはいつているのだろうか。ぼくは社長の顔を見ながら思っていた。

その日からぼくの枚数削りは始まった。

ぼくは一旦書き上げたものを削る大変さをしみじみ知ることになった。普通、10枚のものを書くよりも20枚のものを書き上げるほうが大変だと思うが、逆に20枚のものを10枚に削ることの難しさを思いしらされたのである。

結局、ぼくは1684枚の作品を1年かけて400枚ほど原稿を削ったのである。

まさしく身を削る思いで。(つづく)

### まちの研究所コーナー ①

ゲストを招いての第1回「まい研」定例会

地元の市民に愛され支えられている蒲鉾を！

長谷 博司（まいづる市民自治研究所事務局長）

2月14日（火）、記念すべき「まい研」第1回定例会を開催しました。舞鶴蒲鉾協同組合の会議室をお借りし、舞鶴蒲鉾協同組合参事の辻義雄さんにお忙しい中、お話を聞かせていただきました。

まず、蒲鉾の製造等を簡潔に案内するビデオを視聴し、続いて辻さんの講演を受けました。辻さんは、20数年前、食肉関係の研究所に在職されていたところを、舞鶴でも水産の研究所を立ち上げたいという地元の熱い要望を受け、果敢にも転職された経歴の方です。以来、「研究所の場所は今は倉庫になっていますが」とユーモアたっぷりに話され、舞鶴の蒲鉾の発展のために、開発に営業にとたゆまず努力をされてこられました。

舞鶴は蒲鉾協同組合が、原料の吟味、調達、卸、そして販売に至るまで、まさに構成員の協同組織として維持・運営されている全国的にも珍しい形態であるという説明を受けました。他の地域では、協同組合という名称は同様であっても、福利互助的事業が主であるといえますから、あらためてその底力の強さと深さを感じ入りました。

辻さんも若い頃は、関東方面への進出も自ら開拓し、順調な実績を重ねていたことがあ

ったが、些細なミスが発生により大きな痛手を蒙ったという苦い経験を披露されました。そこから、ひとつの教訓として、消極性ではない自らの範疇の見極めをしながら責任ある事業運営を展開していくことを目指すという方針を確立した、という趣旨のお話をされました。

聴講していた者として、このことは、今の世の中が、無理や背伸びを重ね、拡大・拡張こそ繁栄の常道のような風潮がはびこり、結果として、地に足のついた産業も事業も齟齬をきたしている現状への貴重な警鐘のようにも聞くことができました。地場産業の発展への自覚と熱意が懇々と伝わる講演内容に一同は大きな感銘を受けました。

舞鶴は、蒲鉾類の年間消費量が全国平均のおよそ1.5倍といます。「地元の市民に愛され支えられている蒲鉾をこれからも大事にしていきたい」という辻氏の言葉で講演は終了し、その後、質疑応答を経て、マイナス30度の保冷倉庫を体験見学させていただき、第1回定例会は充実したものとして閉会しました。

## 全国のホット情報 ⑦

### 第48回自治体学校 in 名古屋

京都のみなさんお待ちしております

現地実行委員会・事務局次長 亀谷 博光（東海自治体問題研究所）

京都の皆さん今日は。

今年の第48回自治体学校は、名古屋開催です。みなさん、ぜひ、ご参加下さい。現地実行委員会として京都の皆さんに少しでも前宣伝をさせていただきます。

### 歴史の転換点に立つ自治体学校になるか

私は、憲法「改正」が国会の現実的テーマとなる日が来るとは考えてもいませんでしたが、今回の基調講演は、「憲法と21世紀の日本」（仮称）とし、全体集会も分科会も全体実行委員会では意欲的な準備がされています。

### 「純情きらり」の「味噌」、「産廃、港、水害」の現地見学分科会を準備

さて、現地実行委員会ですが、東海地域には全国にある問題のほとんどがそろっています。歴史や文化では、京都の奥深さには圧倒されますので、より、現実的問題を皆さんに見ていただき、交流できる現地見学分科会を準備しています。

地場産業・伝統産業として『味噌』を取り上げました。NHKの「純情きらり」を見ていますか？愛知の三河地方は地場の醸造産業が盛んな地域です。そこで、手づくりと伝統

にこだわる「野田味噌」と百年の伝統を持ち、使った「なたね油」をトラックの燃料に再利用するエコプログラムに参加している「太田油脂」を見学します。

産廃・不法投棄はどこでも大変な問題になっています。投棄量が52万立方メートルを超える国内最大級と言われる「岐阜市・椿洞」を見て、規制の条例や対策、環境復元の問題を交流しましょう。工業出荷額日本一の名古屋港や6年前の「東海豪雨」の都市型水害の現場とその後の対策を見学し「安全なまちづくり」についての交流を考えています。

その他、「愛知は元気」とマスコミで言われていますが「その実態は・・・」特別報告(3日目)。また、「名古屋弁」を十分に味わっていただく「おもしろ、楽しい文化講演」(3日目)も準備しました。「名古屋うまいもの市・大交流会」(地酒の持ち込み大歓迎)も期待して下さい。

夏は、京都に負けず暑い名古屋ですが、「いっぺん、きてちょう」、「まっとるよー」。

### 子ども主人公の学校づくり ⑨

## 父母との垣根を低くした「宴会」懇談会 「父母の学校参加」ーその2

大平 勲 (前京都総評議長・京都教育センター事務局長)

教室での「学級懇談会」の広がり限界を感じたとき、生徒が父母を学校に呼んだように親子参加の行事を企画したらと考えました。中学生が来るかなどの不安もありましたが、ハイキング、ボーリング大会、バーベキュー、ゲーム大会など子どもの要求に沿って学級委員の父母と担任が企画するので、ここでも子どもは主人公です。自由参加なんですけど大部分の生徒が参加してくれ、学校や家庭の枠を超えた交流の姿は父母や教職員にとっても新鮮でした。

こうしたとりくみにはクラス15000円のPTA予算が生まれ、会費の有益な使い方として評価されました。学級活動が活発になることは、PTA全体の活動を質的に変えていく力となり、「学校の後援会」から「子どものための組織」へとPTA本来の機能を発揮するようになり、運営も民主化されました。

そして、ある日の本部役員会で、学校に滅多に顔を出さない父母を引っ張り出すにはどうしたら良いのかという話題になった時、お母さん役員の一人が「ビールでも出したらどうやろ」と言い出したのです。よく行われた役員会後の酒席には会員の批判もあり、私は「何とばかりなことを」と思いましたが、家に帰って考えて、学校と勤務時間を外したら面白いなあ気づきました。役員会ではすんなりOKとなって、2000円程度の会費制「宴会」つき懇談会が学年毎に土曜の夕方に公民館などを借りて開かれました。

どの学年も100名近い参加があり、仕出し屋、酒屋、電気屋（カラオケ）などの会員からの出血サービスで、安上がりで豪華な「ド宴会」です。若い先生は参加を渋りましたが、私は「心配いらん」と説得して学級委員長さんとのカラオケデュエットで気持をほぐしました。飲めや歌えやのどんちゃん騒ぎが一段落するとあちこちのテーブルで本音の懇談会がごく自然に始まります。教師の体罰への不信や批判も出ることがありますが、こうした場ではカドがたちません。父母と教師は本来立場も違うし、社会人としての考え方にも距離があるのが普通です。でも、うち解けた関係が出来るなかで問題行動の生徒への指導方法もメンツにこだわらず一緒に考えるようになります。そして最後は「良かったなあ、またやりましょう。」の声が集まり、一度でも参加した父母は次年度以降も必ず参加され、3年生では8割ほどの家庭から来るほどの盛況でした。

こうした懇親の様子は父母を通して子ども自身にも伝わり、「先生、きのうはええ機嫌で二次会も行ったそうやな」と翌朝早速言われます。こうした和やかな関係は子どもにとっても何かほっとさせるものがあって、父母とのつながりを通して教師の存在を身近に感じるようになってきます。この破天荒なPTA行事は培良中学校の名物的伝統として、私が転出したあとも長く続けられました。（つづく）

## 京都研究所 ことしが設立30周年

1976年5月8日に京都自治体問題研究所が設立されました。以来30年会員や読者にささえられて今日を迎えました。今年はメモリアルイヤーです。

### 30周年記念総会

日 時： 2006年7月1日（土）受付午後1時 開会1時30分

場 所： ホテルニュー京都（堀川丸太町）

記念講演： 新しい時代の自治の構想（仮題）

加茂 利男 大阪市立大学教授。自治体問題研究所理事長

議 題： 1、2005年度活動報告、決算

2、2006年度研究活動方針案、予算案

### 30周年記念レセプション

京都自治体問題研究所総会終了後、5時からおこないます。

先輩理事の貴重なお話や、21世紀の未来を大いに語り合ひましょう。

京都研究所の30年の歩みも発行します。会費3000円。

ご参加お待ちしております、ご予約ください。

